

読書会

読んでみよう、話してみよう『KEKKON』

課題図書は平成21年度、ムーブ発行の『ジェンダー白書7 KEKKON 結婚・女と男の諸事情-』。参加者で読みながら、近年の結婚を取り巻く諸事情や男女共同参画について自由に感想を話し合いましょう。

日 時 平成23年10月15日、11月12日、12月3日、

平成24年2月4日、3月3日(土曜日) 13:00~15:00 全5回

場 所 企画ルーム 他

定 員 10名 参加費 500円(本代込み)

12月3日は、課題図書の執筆者で「婚活」という言葉の提唱者、白河 桃子さんの講演会です。

お問い合わせ 情報課 TEL・FAX 093-583-5082
E-mail move@move-kitakyu.jp

ムーブ利用のご案内／施設の紹介

大セミナールーム

5階

講演台、ホワイトボードを設備。
プロジェクター、スライド、スクリーン、パソコンによるプレゼンテーション等にも対応可能です。

定員165名のセミナールーム
シンポジウム、講演会、研修などにご利用ください。



茶 室

4階

立札(腰かけ)形式の趣のある一室。
一通りの基本茶道具が揃っています。

定員10名
小規模な会議、研修会、講師控室にもご利用ください。

畳のお部屋もあります。(2畳)



工 芸 室

4階

電気カッナ、糸ノコ等の大工道具をはじめ、彫金用品、七宝焼きなどの道具を揃えています。

定員24名
作業台4台、被服台2台、木工道具一式、
被服道具一式、洗濯機、乾燥機、ロッカーも
あります。



貸室の申込み方法

利用申込み受付開始日と受付の対象となる利用希望日
・ホール(6ヶ月前の月の1日から受付開始)
・ホール以外のお部屋(3ヶ月前の月の1日から受付開始)
なお、1月は4日から受付けを開始します。
※ムーブフェスタのため、7月のホールの貸し出しはありません。7月分のセミナールームなどの抽選日は6月2日になります。

○受付開始日の申込み(抽選会)
受付開始日の午前10時30分までに抽選会場(5階 小セミナールーム)に来所のうえお申込みください。利用希望日が重複する場合は、公開抽選により決めます。

○抽選会後の申込み
受付開始日の午後(抽選会終了後)より、施設の空き状況に応じて先着順にて3階窓口で申込みを受付けます。施設使用料は、申込み時に支払っていただきます。なお、電話での受付けはいたしません。

受付場所 開所時間

3階事務室 9:30~21:30(受付はなるべく21:00までにお越しください。)

休業日

所内整理日及び年末年始(12月29日から1月3日)

施設に関するお問い合わせは

施設運営課 TEL.093-583-3939まで



〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11番4号
TEL.093-583-3939 FAX.093-583-5107
ホームページアドレス <http://www.kitakyu-move.jp>
E-mail move@move-kitakyu.jp

アクセス

JR西小倉駅より徒歩約15分
西鉄バス→「ソレイユホール・ムーブ前」下車
小倉駅バスセンター 27 45 110 134 138
小倉駅前 76 79
北九州都市高速 勝山ランプ・大手町ランプ出口より約3分

平成18年度から北九州市立男女共同参画センター・ムーブの指定管理者

Kitakyushu Forum on Asian Women
財団法人 アジア女性交流・研究フォーラム

Moving

vol. 65

- 特集 1ムーブフェスタ2011 事業報告
- 2地元北九州で活躍する働き女子



世代を越えて 未来へつなぐ 男女共同参画へのムーブメント

ムーブフェスタ 2011 Move Festa



オープニングイベント

乙武 洋匡さん講演会

「チャレンジ精神を忘れずに」

日時 7月8日(金) 18:30~20:20

場所 ムーブ2階ホール

おとたけ ひろただ

講師 乙武 洋匡さん(作家)

オープニングイベントでは、スポーツや教育と幅広く活躍され、常にチャレンジし続ける乙武洋匡さんが、お子さんとのことや小学校教員として勤務していた体験などをとおして、チャレンジする事の大切さを語ってくださいました。

■乙武さんとお子さんについて

乙武洋匡がやってくるという、『五体不満足』という本を思い浮かべるかと思うのですが、なんと本が出て13年経っているんです。大学生の僕も、35歳のいいオジサンになりました。そして、2児の父となりました。長男は3歳、次男は明日で1歳になります。家族4人で楽しく暮らしています。

赴任してきた時には、自分たちとはずいぶん形も違う先生がやって来たと驚いていたのが、毎日のように一緒に給食を食べ、勉強し、休み時間に遊び、そんなことを繰り返しているうちに、体の形は違うけどいろんなことを教えてくれる先生のうちの1人、そんな感覚になってくれたかなと思います。

僕は正直35年間生きてきて、差別や偏見を感じたことがないんです。多分慣れなのかなと思うんです。障害のある人もない人も一緒に過ごす時間を増やして、慣れてくればいろんなことが解決していくのかな、と感じます。



■自己肯定感を育む

子どもに問題を起こしてもらいたくないばかりに、細かいことばかり言っていると、子どもは親や教師の

顔色をうかがいながら萎縮して育っていくしかない。子ども達に対してストライクゾーンを広く構えてあげると「これでいいんだ」と自分らしさを大切にして、のびのびと自信を持って育っていくことができるんじゃないでしょうか。

『五体不満足』という本のなかで、皆さんのがいちばん印象的なシーンとしてあげてくださるのは、僕が生まれてから1ヵ月目に母と対面するシーン。両手両足のない息子にびっくりして、ショックで倒れてしまうんじゃないけど、病院はベッドまで用意していた中、母は手足のない僕を初めて見て、「かわいい」と言って抱きしめてくれた。そのエピソードに集約されているように、父も母も僕の障害にかかわらず愛情いっぱいに育ってくれました。

皆さんのが乙武はそれだけ重い障害があるのに、「いつも明るいですね」「強いですね」と言ってくださるのは、その両親が育んでくれた自己肯定感のおかげと思っています。よって、僕は教育者として、そして二児の父として、子ども達に「僕は愛されているんだ」「私は大切にされているんだ」という自己肯定感を育んでいく番だと思っています。

■スポーツライターから学校の先生へ

大学を卒業し7年間スポーツライターを続けていた僕が、どうして小学校教員という道を選ぶことになったのか、多くの方からご質問をいただくのですけど、すごく大きな転機がありました。今から8年前、4歳だった男の子が、中学校1年生の男の子に殺害される事件が、そして翌年小学校6年生の女の子がカッターナイフでクラスメイトを斬り殺すという事件が起きました。一番可哀想なのは命を落とした被害者であり、そしてそのご遺族の方々であるということは十分認識しているつもりです。でも、僕は事件を起こしてしまった側の少年少女たちにも、同じく可哀想だと、そんな感情を禁じえなかったんです。きっと彼らだってどこかでSOSのサインを出していたと思うんです。周りにいた大人はそのサインに気付いて軌道修正してあげることが出来なかつたのだろうか。実はその責任は子どもたちだけではなく、周りにいた大人、社会全体にも責任があったのではないかと考えました。

僕の小学校の担任の先生は、すごく厳しい先生で、入学して2ヵ月ぐらいして、「君は学校に着いたらこの車椅子に乗ってはいけないよ、校舎の中はもちろん、校庭に出るときも全部自分の足で歩きなさい」と言いました。となりのクラスの先生が「真冬だけでも車イスに乗せてあげたらどうですか」と言ってくださったそうです。それでも先生は「今だけ乙武君を可愛がってあげることはできる。それが本当に彼のためになるんだろうか」と言ったそうです。

実際、その後僕が進学することになった中学、高校、大学、どこもエレベーターはありませんでした。僕は、車椅子を階段わきのスペースに停め、座席をおろして、座席の下に積んでいた鞄を自分で引っ張り肩にかけて、階段の上り下りをして教室への移動も全部自分の足で行っていました。厳しい指導が僕の可能性というものを広げてくれたと感謝をしています。

今度は自分が大人という立場で次



会場からの質問に答える乙武さん

の世代に、子ども達のために力を尽くしていく、それが大きな意味での恩返しになるのではないか、そんな思いから29歳の時に一念発起して、大学にもう一度入り直し、2年間かけて教員免許を取得、平成19年4月から22年3月まで小学校の教員を務めました。本当に僕にとってこの3年間というのは貴重なかけがえのない日々でした。

■東日本大震災について

平成23年3月11日、東日本では大きな震災が各地を襲いました。

3年間子どもたちに「やってみてダメだったらしようがない。そのかわり初めから逃げることだけは許さないぞ」と偉そうに言ってる自分が、「どうせ障害者は無力だ、この僕が被災地に行つたって何もできることがない」と初めからあきらめていたことを反省しました。役に立てるかどうかは分からない、でも行ってみなければ分からない、そんな思いで1週間、とにかく被災地の方々が元気を取り戻すきっかけになればと、被災地をまわってきました。

■チャレンジ精神を忘れないに

僕は20歳のころ1つだけ自分と約束をしました。言い訳をして逃げる人間だけにはなりたくない。なぜなら、僕の目の前には皆さんよりもはるかに見つけやすい、それでいてとても説得力のある言い訳が転がっていたからです。「いや、僕、ちょっと手足がないので、それは出来ませんね。それ、

車いすの僕には難しいです」と言ったら、みなさんも納得してくれるでしょう。「それは難しいだろうな」と。自分の体を、自分の障害を言い訳に使い始めたら、きっと僕の人生何もしなくて済むだろうなと思います。ですから、言い訳をする人間だけにはなるのはやめよう。でも、それって多分、障害だけじゃない気がするんです。僕ら人間は基本的に弱いので、言い訳探しの名人なんです。「私が男だったらできたのに」「俺がもっと若かったらチャレンジしたのに」いくらでも言い訳できるでしょう。生きていると本当に大変なことがあったり、辛いことが起つたり、そのたびに目をつぶりたくなったり、逃げ出したりしてしまいがちになるのは僕自身も同じだし、皆さんにとってもよくあることだと思います。でも、そのときに逃げる言い訳を探すのも自分、でも何とか頑張って乗り越えていこうと思うのも自分、どちらかを決めるのは自分しかいません。今日の講演が、皆さんのチャレンジ精神というものを奮い立てるお手伝いができたなら、こんなにうれしいことはありません。



Moving 3